

宗祇「小松原独吟百韻」の新注解

勢田勝郭

宗祇連歌中、中期の重要な作品の一つとされている「小松原独吟百韻」に対し、現在の研究レベルに則った新たな注解を施す。

Katsuhiro SETA

Commentary of Komatsubaradokugin - Hyakuin

01 陰涼しなほ木高かれ小松原

延徳四年六月一日

賦何路連歌

『解釈』夏の日差しは強いが、群生する小松の木陰に入ると涼しさが感じられる。これからも、この小松原は年ごとに木高くなり、涼しい影を広げることだろう。

※賦物は「何路」、「陰」によつて「陰路」と賦されている。

※表面上の意味は、解釈のとおり。後援者である紀州・小松原館を本拠とする湯川氏一族がますます繁栄するようになつたのが、この発句に込められたメッセージである。なお、湯川氏は清和源氏で甲州武田家流と伝えられる。当時、紀州国人衆の旗頭的存在で、日高・牟婁地方に勢力を張つた。小松原はその居館の地。現在の御坊市湯川町小松原付近がその故地と推定されている。この時の館主は政春。長享二年四月五日の宗祇の北野会所宗匠始めの百韻「何路」等に一座している。源政春の名で『新撰菟玖波集』に五句入集。なお、延徳四年には、畠山基家を討つため河内に在陣していた（公開シンポジウム「湯川氏の城・館・城下町」発表資料集、一六ペー）とのこと。東大国文学研究室本に「祇公独吟湯川河州戦場祈禱」とあるのは、それと関係するかも知れない。

本稿が取り扱う連歌は、宗祇が延徳四年六月一日に独吟したと伝えられるものである。本作品の注解としては、現在もなお『宗祇名作百韻注釈』（昭和六〇年）が流布しているが、以後の連歌研究の進展の結果として、今ではさすがに不十分な所の多いものとなつてゐる。本稿は、それに対し、今日の研究レベルに則した新たな注解を提供しようとするものである。

テキストは『宗祇名作百韻注釈』所載のものを基礎とし、諸本と校合して、仕立・付合・去嫌の面でもつとも問題がないと思われるものを私に設定して用いた。ただし、紙幅の都合上、その設定の過程について具体的に述べることは省略せざるを得なかつた。また、寄合の指摘も連歌の注解では重要であるが、これも必要と思われる範囲にとどめた。去嫌については、末尾に一覧表の形で示すこととした。それについては、拙稿「連歌去嫌の総合的再検討」（奈良工業高等専門学校「研究紀要」第五二号）を参照していただきたい。ネット上で見ることができる。一覧表の「凡例」も、そこに譲る。以上、各点、了解されたい。

本百韻には、陽明文庫に蔵される古注が一種存在し（宗牧注と伝えられるが、後人の手も加えられているようである）、それが『宗祇名作百韻注釈』中に収載されている。大いに参考とさせていただいた。学恩に深く感謝するものである。

※「大原や小塩の山の小松原はや木高かれ千代のかげ見む」（後撰・一〇・一三七三、
「つらゆき」）を本歌としている。

※『宇良葉』に入集（二二一）、『自然斎発句』に入集（八三一）。

陰涼しなほ木高かれ小松原

02 風しづかなる夕立のあと

《解釈》暑い一日だったが、夕立が通り過ぎて涼しくなった。とりわけ群生する小松の原の木陰は本当に夏を忘れるほどである。風は静かに樹間を吹きすぎて行く。これからも、この小松原は年ごとに木高くなり、涼しい影を広げることだろう。

※「涼し」に「夕立」、「松」に「風」が寄合。ただし、どちらも指摘に及ばないレベルであろう。このレベルの寄合を一々指摘していくはキリがない。以後、寄合の指摘は、必要と思われる範囲にとどめる。

03 風しづかなる夕立のあと

《解釈》夕立のあと、涼しい風が静かに吹き過ぎて行く。待っていた月が、ようやく外山の向こうに姿をあらわした。夕立の雲は、どこかに行ってしまったようだ。

04 待ち出づる外山の月に雲きえて

《解釈》覆っていた雲が消え、待っていた月がようやく外山の向こうに姿を見せた。その月の光に照らされて、奥深い峰までも秋の色となっていることが知られる。

05 深き峰さへ秋ぞ知らるゝ

《解釈》山間の渓流。冷ややかな水は激しい音をたてて滔々と流れ行く。その水の色と音に秋の来たことが実感される。この水は、あの奥の峰の滝から流れ落ちてきただろう。そこでは、秋が更に深く実感されるに違いない。

※前句の「さへ」の処理に迷つたが、右の「ことくである」「その上…まで」と現在ある作用・状態の程度が加わつたり、範囲が広まつたりする意を表す（岩波古語辞典）。

※第三句から山類が三句連続。よつて体用の沙汰が必要となるが、第三句の「山」は体、第四句の「峰」も体。第五句の「滝」は、水辺としては体であるが山類としては用で、問題はない。

06 音は埋もれぬ岩の下水

《解釈》滝から流れ落ちた水は、そのまま岩の下を潜つて流れゆく。水流は一時的に視界から消えるが、その音は、埋もれることなく聞こえ続ける。

07 音は埋もれぬ岩の下水

《解釈》普段なら岩根のあたりを流れている水が降る雪に埋もれて見えなくなつてい

る。しかし、まだそう寒くはないので、雪の下では、水は凍りつくことなく流れ続いているようだ。その音が聞こえる。

※前句の「音は埋もれぬ」の「は」を、どう理屈づけるかという付合であるが、見事に処理している。「岩の下水」は、先の付合では、岩の真下を滔々と潜り流れる水。この付合では、岩根のあたりを流れる細流がイメージされる。

※「埋もる」に「雪」が寄合。他の例は「つひにその名の埋もれはてめや／通ひ路の雪うらめしく立ち別れ」（因幡千句・第五「山何」三〇／三一）など。

08 枯葉ぞかゝる笹分くる道

《解釈》笹の群生を分けつつ道を行く。すぐに凍りつく程でもない薄雪が笹の葉に降りつもる。それはまるで、白く褪せた笹の枯葉が落ちかかっているようだ。「野を分くる道」は「旅」であるが、「笹分くる道」は「旅」ではない。解りやすい例を挙げると、元亀二年千句・第一「何路」第一二句で「踏み分け出づる道の笹原」と詠まれた後、第一五句で「いづくにか結びもよらむ仮枕」と「旅」が詠まれている。もし「旅」であつたなら、五句以上隔てられるはずである。

09 枯葉ぞかゝる笹分くる道

《解釈》朝、旅の宿りを出る。風が強く私の袖を翻す。笹の群生を分けつつ行くと、風に煽られた枯葉が降りかかる。野の道は、遙かに続く。

※前句の「枯葉」は、先の付合では笹に降りかかる雪のこと。それを、風に吹き煽られた笹の枯葉とした付合である。付句の「風は袖ふく」という表現から、笹の枯葉が吹き煽られる様を想起できるかどうかが解釈のポイント。蛇足だが、笹の群生は、下に枯葉が落ち敷かれているもの。それが風で煽られて降りかかるのである。

※「笹分くる」に「朝」「袖」が寄り合う。「秋の野に笹分けし朝の袖よりも逢はでこし夜ぞひぢまさりける」（古今・一三・六二二、なりひらの朝臣）の歌が有名。連歌での例は「笹分けくれば轟ちる音／しをれけり逢はで帰さの朝の袖」（永原千句・第九「何袋」八八／八九）など。

10 寝し里いづく跡も知られず

《解釈》朝、旅の宿りを出で、遙かな野を行く。風が袖を吹き過ぎて行く。昨夜寝た里はどの辺りなのだろうか、もう判然としない。

11 見るがうちに昔ともなき夢さめて

《解釈》この旅の途中、どこかの里に一泊した夜、昔自分が若かつた頃の夢を見た覚えがある。ただ途中で目が覚めてしまつて、そこにいたのは年老いた我が身。あ

の里は、どこだったのだろうか。今はもう判然としなくなっている。

見るがうちに昔ともなき夢さめて

12

その人ならぬ面影ぞ憂き

『解釈』あなたの夢を見ました。目が覚めても、その面影ははつきりと残っています。

でもそれは、今あなたの面影ではありません。以前、私を誰よりも愛してくれていた頃のあなたの面影なのです。あの頃のあなたは、どこへ行つてしまつたの

でしょうか。私は辛くてなりません。

※「憂し」などという主観的な語を用いて、あたかも作者が当事者の「ごとき立場になつて付けるのが宗祇好みの「恋」の手法。「心變はりし人の面影」などとするのが平凡で普通。「人の心の變はる世の中」などとするのが下手の極み。若い人のため。

その人ならぬ面影ぞ憂き

13 昨日今日なれきて何か憎からむ

『解釈』心変わりをして、あなたは私から去つて行きました。それでも、私はあなたを愛しています。ほんの少し前まで、一緒に時をすごした仲です。あなたが心変わりしたからと言つて、急にあなたを憎むことなどできないのです。今でも、あなたが浮かびます。でもそれは、今あなたの面影ではありません。以前、私を誰よりも愛してくれていた頃のあなたの面影なのです。私は辛くてなりません。

※付句の「何か憎からむ」を、自らに対する自問自答の上の反語として解釈するのが、宗祇流の連歌として正しい。これは、宗祇の連歌を読み続けることによつて、おのずと知れる所である。これも、若い人のため。妄言多謝。

昨日今日なれきて何か憎からむ

14 思ふあまりの恨みとを知れ

『解釈』あなたの心変わりが恨めしくなりません。けれど、私があなたのことなどを思つていいのだとしたら、何も恨めしくは思わないことでしょう。あなたを愛しているからこそ、あなたが恨めしいのです。ほんの少し前まで、一緒に時をすごした仲です。あなたが心変わりしたからと言つて、急にあなたを憎むことなど、できるはずがないでしよう。

※第一〇句で「知る」が用いられている。同字は五句以上を隔てねばならないので、指合を生じている。後の紹巴時代の連歌なら、それだけで論外となる所であるが、宗祇の連歌の去嫌は比較的鷹揚であり、間々見受けられる事象である。

思ふあまりの恨みとを知れ

15 よしや花散らばそれとも打ちわびて

『解釈』「花よ、そんなに散りたければ、勝手に散ればいい。私はそれでいいのだ」などと、お前に対しても私が言うのも、本当は、お前が散つてしまふのが、余りに惜しくてつらいからなのだ。そんなことぐらい、解つてくれよ、な。

よしや花散らばそれとも打ちわびて

16 ひとり暮らせる古里の春

『解釈』古里での独居生活。普段は訪ねてくる人とてない。それでも、春になつて花が咲けばと期待していたが、やはり誰も来ない。もういい、花よ、もう散りたいなら散つてくれ。寂しくてならないが、変に甘い期待をした私が悪いのだ。

ひとり暮らせる古里の春

17

霞むなよ山になぐさむ窓の前

『解釈』古里での独居生活。春となつても訪ねてくる人とてない。移りゆく山の姿を窓の外に眺めて、寂しさを紛らわせる。だから、霞よ、山を立て隔てないでくれ。

霞むなよ山になぐさむ窓の前

18 消ゆれば月を灯のもと

『解釈』窓の外がほのかに明るくなつた。月が出たようだ。灯火を消して、窓から山の端の月を眺めやる。山家の生活は寂しいものだが、こんな所に慰めがあるのだ。月よ、どうか霞まずに澄んだ姿を見せてくれ。

※前句の「山になぐさむ」は、先の付合は、「山を眺めて慰む」こと。この付合では「山の生活において慰む」こととされていて、解釈した。如何。なお灯火を消すのは、室内の暗い方が、月を美しく眺められるからである。

※「窓」に「灯」が寄合。例は「梅が香ふかき窓ぞこもれる／灯を暮るゝ宿りのいしべにて」（宝徳四年千句・第七「何木」一四／一五）など。証歌は「これのみとどもなふ影も小夜ふけて光ぞうすき窓の灯火」（新勅撰・一七・一一八二・入道二品親王道助）など。

消ゆれば月を灯のもと

19 釣船も心ややどす秋の海

『解釈』漁りの火が消されると、あたかも月が灯火であるかのように秋の海を一面に照らす。この情景には、釣船に乗つている海士たちも心を留めることだろう。

釣船も心ややどす秋の海

20 夕波きよく雁わたる空

『解釈』秋の海辺。夕方になり、清冽な波が打ち寄せ、空を雁が鳴きつつ渡つてゆく。

この情景には、釣船に乗つている海士たちも心を留めることだろう。

※「船」に「雁」が寄合。他の例は「霧くらき湊に船やかゝるらむ／声まづ落つる雁の一つら」（顕証院会千句・第十二「字反音」三五／三六）など。「秋風に声をほにあげて来る船は天のとわたる雁にぞありける」（古今・四・二二二・藤原菅根朝臣）の和歌が有名。「海」に「波」が寄合であることは、指摘するまでもない。

夕波きよく雁わたる空

21 晴れのぼる霧のむら芦風見えて

『解釈』霧が立ち昇るにつれて、下の方が次第に晴れ、海辺の状景が見渡される。清

冽な夕波が打ち寄せ、群生する芦が風に揺れている。上空はまだ霧に覆われているので姿は見えないが、雁が渡つて行くのであろう。その鳴く声が聞こえる。

※近代の注には「はれのぼる」の語は勅撰集にはないとあるが、「外面なる檣の葉しをれ露おちて霧はれのぼる秋の山本」（玉葉・五・七三六、前参議雅有）などの例がある。連歌では「霧はれのぼる四方の大空」（文安月千句・第九「何水」二）など。

22 晴れのぼる霧のむら芦風見えて

またかき乱れ時雨れてぞゆく

《解釈》時雨が降り通つた後の海辺。霧が立ち昇るにつれて、下の方が次第に晴れて行き、風が、群生した芦の葉いっぱいに置かれた露を、まるで一度時雨が来たかと思うほどに吹き散らしているのが見える。

※付句の「また」という措辞から、時雨が直前に一度降り通つてることを読みとる所が解釈のポイントである。

※「芦」に「乱る」が寄合。他の例は「穂に出づる芦間に通ふ船見えて／払ひもあへず露乱るらむ」（頤証院会千句・第一「何人」三一／三二）など。ただし「芦」に「乱る」は所謂「用付」で、後の連歌では好まれない。

またかき乱れ時雨れてぞゆく

ふりすてし袖は誰が世に引かるらむ

《解釈》きつぱりと振り捨てたはずの俗世。それなのに、私の心は時に激しく乱れ、袖に涙の時雨が降る。これは一体、いつの過去世の誰との縁に引かれていたからなのだろうか。

※前句の「時雨」を、「涙の時雨」に取りなして句境を鮮やかに転じている。

※付句の「ふりすて」には「降る」が利かされ、それが降物（この場合は「時雨」と寄り合う。他の例をあげると、「あとはたゞ振り捨てゆく鈴鹿山／秋の時雨にぬれ／し袖」（氏富家千句・第九「百何」七三／七四）など。「古る」「経る」も同じように用いられ、稀ではあるが確立されたテクニックである。

ふりすてし袖は誰が世に引かるらむ

身はしのぶべきいにしへもなし

《解釈》一度はきつぱりと振り捨てたはずの俗世。それなのに、時に袖を引かれるようになる。自分には、偲びたくなるような昔の懐かしい思い出なんて何もないのに、これは一体、いつの過去世の誰との縁に引かれたものなのだろうか。

25 いくにてすめるも仮の草の戸に

《解釈》自分には偲びたくなるような昔の懐かしい思い出なんて何もない。どこで住もうと、所詮この世は仮のもの、そう思いきつてこの草庵に住むことにしたのだ。

※解釈には言わなかつたが「それなのにこの寂しさは何なのだろう」と言外に言つていると受け取るのが、宗祇流連歌に対する態度である。若い人のため。

※「草の戸」の「草」は、植物として取り扱われないのが古来の作法。従つて、第一二一句の「芦」とも、第二七句の「花」とも、指合にならない。

いづくにて住めるも仮の草の戸に

26 心とまるはたゞ山の陰

それは悟りきつた場合のこと。自分のような中途半端な者はやはり、閑寂な山陰で暮らしたいと思われるのだ。

心とまるはたゞ山の陰

《解釈》夕暮の色が次第に深くなる頃、私は山陰に咲く花をながめている。帰らねばと思うが、中々ここを離れることができない。鳥も塘に帰るはずの頃なのに、わざわざやつて枝に止まり鳴いている。鳥よ、お前もこの花に心が留まるのか。

※付句のポイントは前句の「心とまる」の「とまる」を、「鳥が花の枝に来て止まる」に利かせている所である。発想に意外性があり、そこに俳諧味が感じられる。近代の研究者には殆ど無視されているが、それも、宗祇流連歌の一つの要素として忘れるべきではない。『下草』に入集（続類從本一〇〇〇）する。なお第三八句等を参照されたい。

27 鳥の音も夕暮深き花に来て

鳥の音も夕暮深き花に来て

霞むを見れば月ぞ仄めく

《解釈》夕暮の花。あたりは次第に暗くなつて行くが、鳥はまだ帰りたくなさげに鳴いている。空を仰ぐと、月が出てたようだ、霞の向こうに仄かな光が見える。

霞むを見れば月ぞ仄めく

春の夜を思はぬ人や待たるらむ

《解釈》春の夜の空は薄く霞がかかつていて、それを通して、仄かに月が光を放つているのが見える。この春の夜の情趣に惹かれて、あの人気が訪ねてくるだろうと期待していますが、あの人人はまだ来ないので。ひょっとしてあの人人は、こんな

素敵な情趣も理解できない人なのでしようか。いや、そんなことはあるまい。

30 共に憐れむ契りならばや

《解釈》約束どおり、あの人気が訪ねてきてくれて、二人で、この情趣深い春の一夜を共にしたいと待つていていますが、あの人人はまだ来ないので。ひょっとしてあの人人は、こんな春の夜の情趣も理解できない人なのでしようか。いや、そんなことはあるまい。きっと来てくれるはずだと思って、私はなおあの人を待つていて。

※前句の「春の夜」に対し『和漢朗詠集』「春夜」の部に引かれて有名な「背灯共憐深夜月」（白楽天）の詩句に拠つて「共に憐れむ」と付けた付合である。なお、詩句の原拠は『白氏文集』卷十三「春中与廬四周諒華陽觀同居」。

共に憐れむ契りならばや

31 忘るとてそれと倣はむこともなし

《解釈》仮にあなたが私のことを忘れてしまつても、私もあなたに倣つてあなたのことを忘れてしまつたりはしません。私も忘れてしまえば、二人の仲はそれ切りです。

でも、私が忘れずにはいると、あなたが私のことを思い出しさえすれば、また、今までと同じように、互いに思いあう仲となることができます。私たち二人の関係は、前世からそのように決まつていてますよ。

※『下草』に入集する（続類從本七二二）。仲のよい夫婦の戯れの会話とした付合である。伝統的な「恋」の作法に反した付合で、そこに俳諧味も感じられるが、それも宗祇連歌の恋句の一体。「まばゆからしなさのみ慕ふな／契り来し中の年月つむり来て」（三島千句・第九「朝何」四〇／四二）などもこの類であろう。

忘るとてそれに倣はむこともなし

《解釈》あなたは私のことをすっかり忘れてしまつていてるかも知れませんが、私は、あなたと同じようにあなたのことを忘れたりはしません。忘れようとしても、無情なあなたの恨みが、心に思い知られるからです。

※「知られこそせめ」の「れ」が、「自発」の助動詞であるとするのが解釈のポイント。忘れ去られた女性のせつない思いがよく表現された好付合ではあるまいか。

恨みのほどは知られこそせめ

32

大淀の松による波さわぐなよ

《解釈》大淀の松に打ち寄せる波よ、そんなに立ち騒ぐな。お前が「恨みて返る」ということは、わざわざ騒がなくとも、もう皆に知られていることだろうから。

※「大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみも返る波かな」（新古今・一五・一四三三、よみ人しらず）の和歌（伊勢物語にもあり）に依拠した付合である。古歌を利用しての句境の転換がきれいに決まつていてる。なお前句の「知られ」の「れ」は、この付合では受身の助動詞になる。

大淀の松による波さわぐなよ

34

見る目もくるし風にゆく船

《解釈》船が、風に煽られながら苦しげに行くのが見える。大淀の松に打ち寄せる波よ、そんなに立ち騒ぐな。あの船が転覆してしまつではないか。

※「見る目」に「海松舟」が利かされ、それが「大淀」「波」と寄合。例は「大淀や波さへ帰る浦さびて／仮の見る目にのこる面影」（住吉千句・第一「何船」六九／七〇）など。証歌は「海士の刈るみるめを余所に大淀の松は霞みてかへる浦波」（建保名所百首・二〇九、俊成卿女）など。また「波」と「船」が寄合なのは常識。※近代の注は、この句を「旅」とするが、「行く船」だけでは「旅」として取り扱われない。一例を挙げると、永正七年四月一日「何人」第五六句で「群れつゝ越える

関の旅人」と詠まれた後、第六〇句で「さして行く／／船見えずなる」と詠まれている。もし「旅」であるなら五句以上を隔てねばならない。第八句を参照されたい。

35 越えがたき秋の山路にやすらひて

《解釈》峻嶮な山を越えて行く途中、眺望の利く所で一休みする。船が風に煽られながら苦しげに行くのが見える。船の旅は楽なようだが、それは海が穏やかな場合だけ。旅が苦しく危険なものであることに違いはない。

越えがたき秋の山路にやすらひて

36 仮寝の袂月にしをる

《解釈》峻嶮な山を越えて行く旅。山路の途中だが、今日はもうこれ以上行くことは無理だと考え、ここで仮寝することにした。月が出ている。旅の辛さが身にしみ、こぼれる涙で袂が萎れる。

仮寝の袂月にしをる

37 庵近く虫もわびつゝ明かす夜に

《解釈》この茅屋に一夜の宿りをようやく借りることができた。寝ようとすると、月が出てる。様々な思いが胸に来し、寝付くことができない。旅の辛さが身にしみ、こぼれる涙で袂が萎れる。近くでは虫が鳴いている。虫よ、お前も、私と同じように、この一夜を侘びつつ泣（鳴）き明かすのか。

庵近く虫もわびつゝ明かす夜に

38 夢になされば思ひならめや

《解釈》草庵での独居生活の秋の夜、眠ろうとしても、様々な過去が胸に来し寝付くことができない。近くで虫の鳴く声がする。虫も私と同じように、この一夜を侘びつつ泣（鳴）き明かすことだろう。もし過去を全て「夢になす」ことができると、こんな思いはしないのだけれど、それは無理。眠れないのだから、夢を見ることができない。だったら、「夢になす」ことなどできるはずがないではないか。

※前句の「明かす」に着目して、眠らないのだから夢は見ないという理屈に気付くのが解釈のポイント。情趣的な表現に包まれているが、意表を突いた論理を主眼とした俳諧味の強い付合である。これも宗祇連歌の一体。前句を「寝で明かす恨み今朝なほ残りけり」などという俗流な句に置き換えれば、この付合の論理の意外性と俳諧性は解りやすくなろう。「虫もわびつゝ」の「も」が効いている。なお第二七句、

第四八句、第七八句、第八七句等を参照されたい。

夢になされば思ひならめや

39

憂かれたゞさらすは言ひも絶えつべし

《解釈》このまま、辛くともかまわない。そうでないなら、一切関係が切れてしまつてもかまわない。あなたと出会つたことを夢になすことができるなら、こんな思ひはないのでしようが、そんなことはできません。私はこれからも、あなたとの思い出を胸にして、生きてゆくのです。

憂かれたゞさらすは言ひも絶えつべし

40

住まじ都の老のあらまし

《解釈》都での生活は、私にとつては辛いことが多い。年をとればいつか閑居な所で心を澄ます生活をしたいと思ってはいるが、中々それが果たせないでいる。都での生活は、このまま、今までどおり辛いことが多い方がよいのだ。そうでなければ、心を澄ます暮らしがしたいとも言わなくなつてしまつだらう。

住まじ都の老のあらまし

41

つれなくや人ごとに見む我が命

《解釈》年老いたなら、都には住まないつもりだ。いつまでも都にいたら、誰もかれもが、老いさらばえている私を無慈悲に見ることだろう（それよりは、人離れた地で、孤独に耐えて暮らすほうがマシだ）。

つれなくや人ごとに見む我が命

42

惜しみかなしむ春秋の空

《解釈》老いさらばえたこの身。誰もかれもが、それを無慈悲に見ていることだろう。このあと、何度の春秋を送り迎えることができるだろうか。そんなに多いはずはない。そうであるからこそ、春秋の空が、とても愛しく惜しく眺められるのだ。

惜しみかなしむ春秋の空

43

山里に経れば草木を心にて

《解釈》山里の生活も長くなつた。何よりも心が寄せられるのは、四季折々の草木の様と空の移り変わり。それらを愛で惜しみながら一年が過ぎて行くのだ。

山里に経れば草木を心にて

44

思ふことなき身ぞしづかなる

《解釈》山里に長い間暮らしていると、人の心も、自然と所与の所のままに生きる草や木の心に近づくだろう。そうなれば、人たるが故の煩惱から解放され、心静かに生きることができるのだ（私もいつかそのようになりたい）。

思ふことなき身ぞしづかなる

45

乱れしもまた治まる君が代に

《解釈》乱れていた世も聖王の御代となり、四海無事に治まつていて。人々は、苦しみ思い煩うことなく静かに暮らすことができる。有難いことだ。

※同折の第二三句に「世」が詠まれているが、「代」は一座一句物、「世」は一座五句物で範疇を異にするので、支障はない。

乱れしもまた治まる君が代に

46

今より道の末たゞしかれ

《解釈》乱れていた世も聖王の御代となり、四海無事に治まつていて。政の道が、今から世の末まで正しくあれと、祈らずにはいられない。

今より道の末たゞしかれ

47

待ち／＼し日よりを今日の船にえて

《解釈》船の旅。天候に恵まれず港を出ることができないでいたが、今日は漸く天候が回復した。これから船が航路を正しくとつて、目的地に無事に着きますように。※前句の「道」は先の付合では「政の道」のこと。それを「船の道」（航路）に取りなしての句境の転換が鮮やかである。『下草』に入集するが（続類從本五五二）、そこが宗祇の気に入つた所であろう。

待ち／＼し日よりを今日の船にえて

48

波馴れ衣はかなくぞ干す

《解釈》天候に恵まれずずっと漁に出ることができないでいたが、今日は漸く天候が回復して船を出すことができる。常に波に濡れてよれよれになつている海士たちの衣も、この悪天候の間に干されて乾いたようだが、また、濡れてしまうのだ。※「はかなし」は、この場合「手ごたえがない。頼りない。むなしい」（岩波古語辞典）の意。「どうせすぐ濡れるのに、干しても空しいよね」と、ことさらな理屈で面白がつている所にちょっととした俳諧味がある。

波馴れ衣はかなくぞ干す

49

恋は淵仮のあふ瀬をたのむなよ

《解釈》恋の深い淵に落ちた人の衣は、いつも涙でびしょ濡れ。それは、まるで海士たちの波馴れ衣と同じ。恋しい人に逢う時は干されて乾くかも知れないが、それも所詮はかない一時的なこと。別れた後は、また涙で濡れるのだ。

※前句の「衣」は、先の付合では、字義どおり漁りの際の波に濡れた衣。それを、恋の涙に濡れる衣として、優美な表現で、鮮やかに句境を転じている。

は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞけふは瀬になる」（古今・一八・九三三、読人しらず）の和歌に依拠したものである。

憂き人心何か常なる

51 いたづらの言の葉おほき筆のあと

《解釈》辛いことだが、人の心が永続することはない。必ずいつかは移りゆくものなのだろう。あの人からの手紙も、最近はすぐにバレるような言い訳や嘘ばかり。

もう、あの人的心は、私以外の誰かに移っているのだ。

52 いたづらの言の葉おほき筆のあと

つたはり来ればその法もなし

《解釈》 积尊の教えも、インドから日本に伝来するうちに、本質が失われてしまった。

多くの經典が伝わっているが、そこに書かれているのは、本来の仏教ではない。

本来の积尊の教えは、不立文字教外別伝であるのだ。

※ 右のごとく解釈すると、宗祇が特に禅的な思想の持主であつたがごとく受け取られるかも知れない。彼には、他にも「庭前柏樹子」の公案を踏まえた「これやこの西

より来たる法の道／庭の植木の色かへぬかげ」（三島千句・第六「初何」五一／五二）の「ごとき付合もある。ただし、この程度の仏教の知識は、当時の知識人なら

常識の範囲で、彼には、西方浄土への往生を願う句や、弥勒出世を待つ句も多く、必ずしもそつとは言い切れないというののが現在の私の考え方である。若い人のこれから

らの研究の指針となればと、敢えて言及した。

※ 前句の「言の葉」は、先の付合では、不実な男の嘘・言い訳。それを經典の言葉に

取りなして句境を転換した「力技」の付合である。これも宗祇の一体。

つたはり来ればその法もなし

53 聞くや誰遠山寺の鐘の声

《解釈》寺の鐘が衝かれるごと、その音は四方に響き伝わるが、遠くなるに従つて小さくなり、やがて誰にも聞こえなくなる。寺の鐘は、聞く人の仏性を覚醒させるものと言われるが、誰にも聞こえなければ、その教え（法）もないのと同じだよね。

※ 前句の内容を、意外な状況設定に取りなし、強引に理屈づけて知的に遊んだ俳諧性の強い付合である。第三八句等を参照されたい。

聞くや誰遠山寺の鐘の声

54 晓月は我のみも見じ

《解釈》遠くの山寺の鐘の音に目を覚ます。曉の空を仰ぐと、月がかかっている。あの鐘の音を聞いたのは、他に誰がいるのだろうか。今この月を眺めているのは、

私だけではないだろうけれど……。

※ 前句の「誰」に対して「我」と付けているのが、ちょっとしたポイント。「昔の夢は誰に見すらむ／我をだに忘るゝほどに身は老いて」（延文五年十一月十三日「何船」一六／一七）など、古くからある手法である。

※ 「鐘」に「曉」が寄合。他の例は「帰るさのものとこそ聞け鐘の声／逢ふも名残のつらき曉」（応永三十一年二月二十五日「唐何」五九／六〇）など。「高砂の尾上の鐘の音すなり曉かけて霜やおくらむ」（千載・六・三九八、前中納言匡房）が有名。

55 暁月は我のみも見じ

《解釈》曉の月を眺めていると、あいにく時雨が降つてきた。曉の空、時雨の雲間に薄く光を放つ有明の月の凄々たる姿。今それを見ているのは、私だけではないだらうけれど……。

※ 「神無月有明の空の時雨るゝをまた我ならぬ人や見るらむ」（詞花・九・三二・四、赤染衛門）を念頭にした付合であろう。詞書に「思ふことはべりける頃、寝のねられず侍りければ、夜もすがら眺め明かして、有明の月のくまなく侍りけるが、にはかに生き暗し時雨れけるを見て詠める」とある。

56 露けくわくる野辺のゆくすゑ

《解釈》冬が来るまでにと道を急ぐ旅なのに、あいにくの時雨で道がはからだらない。

降り過ぎたあとも、置き残された露でびしょ濡れになりながら、私は野を分けて行くのだ。

57 露けくわくる野辺のゆくすゑ

《解釈》露で袖をびしょ濡れにしながら、野辺の道を行く。もう夕暮だ。今夜はどこを旅の宿りとすることになるのだろうか。故郷も今頃は、同じように夕露でいっぱいになつていることだろう。しかし、故郷にいれば、今夜の宿りを捜す必要はないのだ。旅の辛さが改めて身にしみ、私の袖は涙で更に露けくなる。

※ 「此くある」の「かゝる」に「降りかゝる」の「かゝる」を利かして、「露」に「かゝる」が寄合。他の例は「忘られぬ露のなきの身にしみて／かゝる思ひをいかにかもせむ」（明応九年五月七日「何路」九一／九二）など。ただし「露」に「かゝる」と付けるのは用付で、後の連歌では好まれない。

※ 「旅の暮」という表現から、今夜の宿りを捜していいる状況を想起できるかどうかが解釈のポイント。実際に宗祇の連歌を真摯に読めば、そう難しいことではない。

58 故郷もかゝらばよしや旅の暮

《解釈》旅中の夕暮。今夜はどこを旅の宿りとすることになるのだろうか。故郷にいたら、こんな情けなく辛い思いをしなくてもすむのに、一体誰のせいだ。誰のせいでもない。自らの意志で故郷を捨てた私自身のせいなのだ。

※ 第五三句に「誰」が用いられており、同字が間隔四句で指合を生じている。

59 誰がつらさとか身の憂きをしる
前の世や人に思ひを付けつらむ

『解釈』恋に苦しむこの身、一体誰のせいなのだろう。きっと私は、前世で、誰かの心の中の思ひの火に点火して、焦がれ苦しめさせたのだろう。そうであるなら、誰のせいでもない。私自身のせいなのだ。

※「思ひ」の「ひ」に「火」を利かすのは古典文学の常識的手法。「火を付ける」で、点火すること。この場合は、自分に対する誰か他者の心の中の「思ひ」の火に点火することである。他者に対する自分の「思ひ」の火の場合もある。例としては「夕されば色に螢や焦がるらむ／思ひを人に付くるとを知れ」（頤証院会千句・第五「唐何」五五／五六）が解りやすい。

60 前の世や人に思ひを付けつらむ
花の都のあとと松風

『解釈』かつて花の咲き誇る都のあつたこの地も今は寂れて、ただ松風が吹き過ぎるばかり。この松風も、その当時は、花を散らせはしないかと、多くの都人を心配させたことだろう。

※前句の「前の世」は、先の付合では「人の前世」のこと。それを「昔、ここが都であつた時代」に取りなして、句境を転じており、そこに意外性がある。句の仕立も美しく情感に満ちている。古注に「おもしろき下句なり」と評されている。研究者は味読すべきである。『下草』に入集（続類從本八六八）。

61 春深き志賀の山もとうらさびて
花の都のあとと松風

『解釈』花の咲き誇る都のあつた志賀の山もと。今は寂れて、春深いこの時季にも、ただ松風が吹き過ぎるばかりである。

※「うらさびて」には「浦」が利かされている。今さら例示の必要もあるまいが「石見潟名のみ高津のうらさびて」（享徳二年三月十五日「何路」七五）など。

※「松」に「志賀」が寄合。他の例は「松一本にも風聞きつべし／花の後志賀の都のなほ荒れて」（紫野千句・第十「唐何」五四／五五）など。証歌は「さゞ波や志賀の唐崎こほる夜は松よりほかの浦風もなし」（続拾遺・六・四二六 平宣時）など。

※「都」に「志賀」も勿論寄合である。例は「名残ある都の山をかへりみて／遠ざかりゆく志賀の浦船」（初瀬千句・第九「唐何」一一／一二）など（証歌省略）。

62 霞のいづく渡りする船
春深き志賀の山もとうらさびて

『解釈』志賀の山もとの里は、春深くなつてももの寂しく、ただ濛々たる霞に包まれているばかり。湖水を渡る船もあるはずだが、それも判然としない。

霞のいづく渡りする船

63 起き出づる遠の里／声すなり

誰がつらさとか身の憂きをしる

前の世や人に思ひを付けつらむ

『解釈』川辺に旅の一夜を過ごし、目を覚ます。あたりは一面の厚い霞で遠くが見渡せない。ただ、川向かいの里の方から、人々の起き出した声が聞こえてくる。川渡しの船は、どこにいるのだろうか。

64 身は蓬生に明かす夜ぞ憂き
起き出づる遠の里／声すなり

『解釈』一時は榮達を夢見たこともあつたが、時流に外れ、住まいも、今は蓬が生い茂るようになった。以前を思い出すたびに、今の生活が悔しく、情けなく、床についても眠ることができない。どうやら、夜を明かしてしまつたようだ。離れた里の方から、人々の起き出した声が聞こえる。

※近代の注釈は、この句を述懐とし、第五九句と間隔四句で指合を生じていると述べるが、明白な誤りである。「蓬生での生活」という内容の句は、それだけでは述懐としては取り扱われない。一例を挙げれば、寛正六年三月六日「何人」第二三句で「秋をこそ身にわびつるに老の来て」と述懐が詠まれた後、二句隔てるのみの第二六句で「うら枯れわびし蓬生の宿」と詠まれている。述懐同士なら五句以上を隔てねばならない。同様の例は枚挙に暇がない。実際に調査すれば簡単に解ることである。『新式』には「称述懐詞事、昔・古・老・生死・世・親子・苔衣・墨染袖・隠家・捨身・憂身・命等之類也。凡・雖為述懐之意、不露顯詞者、述懐不用來也」という記述がある。この作法が適用されていると考えるべきであろう。

身は蓬生に明かす夜ぞ憂き

65 我が心月は見るやと影すみて
我が心月は見るやと影すみて

『解釈』一時は榮達を夢見たこともあつたが、時流に外れ、今は、蓬生に夜を明かす身の上。そんな私の心を、月は見てくれているのだろうか、ただ澄んだ光を地上に投げかけるばかりである。

※この付合について、古注は「我が心なぐさめかねつ更科や」云々の和歌を引用し、近代の注もそれに従つて解釈するが、適切ではない。当該の和歌は、後の第八／八二句の付合で本歌として用いられているのは明白。同じ和歌が、同一百韻の二度の付合に繰り返し本歌として用いられるなどということは、あり得ない。「我が心」と「月」という表現は、有名な「我が心いかにせよとか時鳥雲間の月の影に鳴くらむ」（新古今・三・二一〇、皇太后宮大夫俊成）をはじめとして普通に数多く用いられており、「なぐさむ」とか「娘捨」とかと組み合わされられない限り、「我が心なぐさめかねつ」云々の和歌を、特定的に想起させるものではない。

66 風ひやゝかに秋更くる頃
我が心月は見るやと影すみて

『解釈』晩秋。夜風が冷ややかに身にしみて寂しさが募る。そんな私の心を、月は見てくれているのだろうか、ただ澄んだ光を地上に投げかけるばかりである。

※「見どう」ということのない句のようだが、「風ひやゝかに吹きおくる頃」（難波田千

句・第六「村何」八)とか「仄吹く風もひやゝかに聞く」(秋津洲千句・第七「何人」四八)とかいう句と比較すると、やはり出来が違う。一々に指摘できることではないが、宗祇連歌のレベルの高さが、おのずと知れよう。

風ひやゝかに秋更くる頃

67 牡鹿鳴く山は夕べのいかばかり

《解釈》風が冷ややかに吹く晩秋の頃、取り分け、牡鹿の声が侘しく聞こえる山の夕暮は、どれほどのものであるか。

牡鹿鳴く山は夕べのいかばかり

68 思ひ入るべき世の外やなき

《解釈》牡鹿が鳴く秋の夕暮の山。そんな所での独居生活は、どれほど寂しいものであるか。しかし、俗世間の外で生きるのに他にどんな場所があるのか。世を捨てるというのは、その寂しさに耐えて生きる覚悟をするということなのだ。

※「世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿ぞ鳴くなる」(千載・一七・一五一、皇太后宮大夫俊成)を踏まえて「鹿鳴く山」に「思ひ入る」と付けている。

思ひ入るべき世の外やなき

69 憂きもたゞ夢の宿りをなげくなよ

《解釈》いくら辛くとも「この世を捨てて山に入るのだ」などと嘆くべきではない。「世の外」などと言うが、生きている限り、所詮そこも娑婆世界の外ではないのだ。

※「夢の宿り」は「夢のようにはかない一時的な身の置き所でしかない娑婆世界」という内容である。後のものだが、「故郷のもとの悟りに帰りては夢の宿りをいかゞの外」などと言うが、生きている限り、所詮そこも娑婆世界の外ではないのだ。

※第六四句で「憂き」が詠まれており、同字の指合を生じている。

憂きもたゞ夢の宿りをなげくなよ

70 憂きもたゞ夢の宿りをなげくなよ

《解釈》夢のようにはかない一時的な身の置き所でしかない此の世。そこが辛いからと言つて、殊更に嘆くべきはあるまい。雨を避けようと一時的に木陰に身を寄せても、雨の下にいる限り、袖が雨に濡れないことはないのだ。

さながら袖も雨の木のもと

71 梅の花誰が手折ればやしをるらむ

《解釈》梅の花が萎れています。一体、誰が手折ったからでしょうか。こんな雨の中、その人の袖は、きっとびしょ濡れのことでしょうね。どうですか、雨さん?

※梅の花が萎れているのは雨に打たれたせい。それを承知の上で、雨を擬人化して皮肉っぽく訊ねている付合として、解釈は右のとおりである。如何。「さながら」は、この付合では「全部。すべて」(岩波古語辞典)の意となる。

※「袖」に「梅を折る」が寄合。「さし覆ふ袖にも色はしるかりき／枝折る梅に匂ふ

春風」(文明九年正月二十二日「何船」六一／六二)など。証歌は「折りつれば袖こそ匂へ梅の花ありとやこゝに鳶の鳴く」(古今・一・三一、よみ人しらず)など。

梅の花誰が手折ればやしをるらむ

72 帰るを恨む春の鳶

《解釈》梅の花が萎れています。一体、誰が手折ったからでしょうか。いいえ、誰かが手折ったわけではありません。春が帰つて行くからです。もつと梅の花と戯れたいと思つている鳶は、それを恨んで鳴いています。

帰るを恨む春の鳶

73 霞にも今はと雁のやすらはで

《解釈》空に春霞がたなびくようになった。間もなく花も咲くことだろう。それなのに雁は、何のためらいもなく北に帰つてゆく。それを鳶は、何て薄情なやつなのだと、恨めしく思うことだろう。

霞にも今はと雁のやすらはで

74 末にいかなる山を越えなむ

《解釈》春霞の空を、雁は(間もなく花が咲く頃とともに思わず)、何のためらいもなく北に帰つてゆく。あの雁たちは、行く末に、どのような山を越えて行くのだろうか(花の盛りの山以上に魅力的な山でもあるのだろうか)。

末にいかなる山を越えなむ

75 冴えむかふ嵐にわびてまよふ野に

《解釈》野の道を行く途中で迷つてしまつた。吹き荒ぶ向かい風が身に寒い。この先、今日のうちに山を越える予定でいたのだが、そこはどうなつているだろうか。越すことができないなら、諦めるより他はないが、こんな嵐では野宿もできない。どうしようか、私はただ迷うばかりである。

※「迷ふ」には、「道に迷う」の他に「心に迷う」の意も持たされている。

※近代の注釈は、この句を無季(難)とするが、何かのカン違いであろう。「冴ゆ」と言えば単独で冬季として取り扱われるのは、連歌の常識である。

冴えむかふ嵐にわびてまよふ野に

76 日暮れにかかる道のもの憂さ

《解釈》野の道を行く途中で迷つてしまつた。吹き荒ぶ向かい風が身に寒い。日も暮れはじめた。こんな嵐では野宿はできない。宿が見つかるだろうか。何とも情けないことだ。

日暮れにかかる道のもの憂さ

77 まぎるやとたのむ人目も影たえ

《解釈》これだけ道に人どおりがあれば、それに紛れて、見とがめられることはないだろうと待つていたが、日も暮れはじめ、人影もなくなつた。情けないが、今日は出直すことにしてよう。

※今一つ状況がよく把握できない内容の付合であるが、句の主体の人物（男）が、道（普通、女性の家の前の道）で、人に見とがめられないように、何かの機会を覗つている状況として解釈した。如何。「何かの機会」というのは、ひよつこり出できた女の童や乳母に手紙を託すとか、主人の女性に関する何かの情報を聞き出すなど

といふことが普通に想定される所。いわゆる「色好み」の行動であろう。ただし、私自分、この解釈でいいとは今「一つ思えない。御教示を乞う。

まぎるやとたのむ人目も影たえて

恋しきことを誰に忘れむ

《解釈》これだけ道に人どおりがあれば、それに紛れて、見とがめられることはないと思つてはいたが、人影がなくなつた。出直すより仕方ないが、あの人のこととは忘れられない。誰に忘れると言つたつて、誰もいなくなつたのだから、忘れようがないではないか。当たり前だろう。

※「誰もいなゐのだから、誰に忘れる事ともできない」と、理屈にならない理屈を言って戯れた俳諧的な付合である。これも宗祇連歌の一体。第三八句等を参照。

恋しきことを誰に忘れむ

つらしとてまたいづ方に移らまし

《解釈》恋しくて忘れられなくとも、誰か別な人のことを思えば、自然と忘れることができるだろう。そのように人は言うけれども、それは無理。いくら、あの人人が私に対して辛くあたつても、心をあの人以外に移すなんてことは、私はできるはずがないのだ。

つらしとてまたいづ方に移らまし

《解釈》恋しくて忘れられなくとも、誰か別な人のことを思えば、自然と忘れることができるだろう。そのように人は言うけれども、それは無理。いくら、あの人人が

私に対しても辛くあたつても、心をあの人以外に移すなんてことは、私はできるはずがないのだ。

なれ來し庵松風も吹け

《解釈》草庵での独居生活。松風が身にしみて寂しく辛い。しかし、松風よ、吹きたければ吹けばいいのだ。この所がいくら辛いからと言つて、どこに移り住めばいいのか。私の住むべき場所は、住みなれたこの草庵以外、どこにもないのだ。

※前句の「つらし」は、ままならぬ恋の辛さ。それを草庵での独居の辛さに取りなしで、句境を無理なく鮮やかに転じている。

※第七五句に「嵐」とあり、「松風」とは四句を隔てるのみで、指合を生じている。後の連歌なら強く批判される所であるが、宗祇流の連歌は比較的鷹揚である。

なれ來し庵松風も吹け

心こそなくとも月に夢や見む

《解釈》人並みな風雅の心など持たない自分で、今夜の月は格別に身にしみる。

これから、朝になるまで、この月を眺めて夜を明かそう。眠つて夢など見ておれるものではない。住みなれた庵、いつもなら松風の音に眠れなくなるのだが、今夜は、松風よ、吹きたいならいくら吹いてもよいのだ。

※前句で「松風も吹け」と呼びかけているのを理由付けした付合である。「夜もすが

ら眺め明かさむ秋の月」などとするだけでもそここの付合となるが、そこを「心こそなくとも月に夢や見む」と付ける。若い人は味読して、宗祇連歌のレベルの高さを是非感じてほしい。『下草』に入集する（続類従本八八六）。

心こそなくとも月に夢や見む

82 姨捨山の秋の仮ぶし

《解釈》秋、更科の里での旅寝。人並みな風雅の心など持たない自分で、姨捨山に照る月は、やはり格別の美しさだ。これから、朝になるまで、この月を眺めて夜を明かそう。眠つて夢など見ておれるものではない。

※有名な「我が心なぐさめかねつ更科や姨捨山に照る月を見て」（古今・一七八七八、よみ人しらず）の和歌に拠る付合である。「心」及び「月」が、それぞれ「姨捨」と寄合になる。連歌での他の例は、前者は「憂きおもひうたて忘れぬ我が心／姨捨山の月の入り方」（大山祇神社法楽文明十四年万句第四千句・第四「山何」七五／七六）、後者は「月すみて今宵やどりを我に貸せ／秋もむつまじ姨捨の山」（宝徳四年千句・第五「唐何二七／二八」）など。

83 姨捨山の秋の仮ぶし

衣うつ音さへ旅の恨みにて

《解釈》秋、更科の里での旅寝。ただでさえ旅の辛さが身にしみるのに、更に夜通しに打つ砧の音までもが、私を寝られなくさせる。

※「姨捨」に「衣うつ」が寄合。他に「姨捨や仮寝を月になぐさめて／衣うつ夜の風なしをりそ」（明応五年正月九日「何人」七／八）など。ただし、意外なことに「姨捨」に「衣うつ」と詠んだ和歌は、調査の範囲で検出されなかつたが（後考を俟つ）、「更科」に「衣うつ」と詠んだ和歌なら「更科や夜わたる月の里人もなぐさめかねて衣うつなり」（続古今・五・四七三、順徳院御歌）など多い。「姨捨山」は「更科」の地にあると伝統的に言われてきたから、証歌として許容されよう。

衣うつ音さへ旅の恨みにて

84 遠ざかり来ぬ妹も待つらむ

《解釈》故郷から遠く離れ行く旅。故郷の妻もきっと私の帰るのを待つてていることだろう。里の砧の声が、更に望郷の念を募らせる。

※付句の仕立は「去年見てし秋の月夜は照らせどもあひ見し妹はいや遠ざかり」（拾遺・二〇・一二八七、人まろ）を念頭に置いたものであろうか。ただし、この歌は、亡き妻を偲んだもので、この付合とは状況を異にする。

※一句は「妹」の語により「恋」として取り扱われる。第七九句も「恋」で、その間隔は四句。「恋」同士は五句以上を隔てねばならないから、指合を生じていると思われる。

85 変はらじと言ひしを今もたのむ世に

遠ざかり来ぬ妹も待つらむ

《解釈》已むを得ぬ事情で遠く離れて暮らさねばならない二人であるが、あの人人は、

今もきっと私が帰るのを待つてくれていることだろう。「心が変わることはありますせん」というあの人の言葉を、私は今も信じています。

変はらじと言ひしを今もたのむ世に

86 椎柴そよぐ風の風

《解釈》風が椎の木の群れをそよがせる。椎は、これから来年にかけて葉替えをすることでしょう。しかし、私は今も「心が変わることはありますせん」というあの人との言葉を信じています。

※「箸鷹のとがへる山の椎柴の葉替へはすとも君は替へせじ」(拾遺・一九、一二三〇、よみ人しらず)を踏まえた付合。「椎は、これから来年にかけて葉替えをすることでしょう」という解釈は、この和歌を前提として可能となる。

※古歌を媒介にした句境の転換が見事に決まっている。付合は叙情性にあふれ、一句も、もの寂しい初冬の情趣が優美な言葉の連鎖から感じ取られる。下手が付けると「たゞ玉の緒の絶えずともがな」などとしてせつかくの前句を台無しにしてしまう所である。私のレベルではよく出来た付合のように感じられるのであるが、自撰句集には採られていない。この程度は、宗祇にとつては、せいぜい「上の下」ということなのである。宗祇連歌の水準の高さを思うべきである。

87 椎柴そよぐ風の風

《解釈》急に寒くなつて初霜が下りた園生。風が椎の木の群れをそよがせ、その実が地面に落ちると、それを樺鳥がつづいている。

※「なつそひくうなかみ山の椎柴に樺鳥なきつ夕あさりして」(永久百首・三七四、俊頼)の和歌に拠つて「椎柴」に「樺鳥」と付けている。ポイントは、同じ木の実(団栗)の種として「椎」に「樺」と対応させている所。「樺鳥なのに、椎の実をあさるとは、これ如何に」という俳諧味のある付合である。第三八句を参照されたい。

※「樺鳥」はカケスのこと。雑食性だが、秋になると木の実などを貯え、それを食べて越冬する習性がある。その際の状景である。

88 深山づたひのかたはらの里

《解釈》深山の尾根づたいから少し離れた位置にある里の園生。急に寒くなり、今朝は初霜が降りている。そこに樺鳥がやつてきて、団栗をつづいている。

※この付合は、『六家連歌集』に前句と付句を入れ替えて収載する。第八八句はわざわざ入集させねばならないほどのものではない。収載の目的はやはり第八七句(『樺鳥』)という珍しい素材を用いている所が眼目)。その際、第八六句を前句にすると、俳諧味の強い付合になるので、『六家連歌集』の編者は、それを嫌つたものか?もち論、伝来の過程で偶然的な誤りが生じた可能性も否定できない。後考を俟つ。

89 軒近くかけ樋ばかりの水落ちて

《解釈》深山の尾根づたいから少し離れた位置にある里。聞こえるものは、家の軒近く、奥の谷から導かれたかけ樋の水が、水溜めに落ちる音ばかりである。

※「つたふ」に「かけ樋」が寄合。他の例は、「簾の軒端をつたふ声はして/竹のかけ樋は水ぞこほれる」(初瀬千句・第三「何船」二五/二六)など。証歌は、「来る春は峰に霞を先立てゝ谷のかけ樋を伝ふなりけり」(山家集・九八五)など。

※第八七句と「て」止めが打越になつていて。これは、同字が間隔四句で用いられているなどとはレベルが違う極めて稀な指合である。ただし、宗祇流の連歌なら有りうる現象と考えられる。有名な『湯山三吟』では、第六四~六六句で植物が三句連続している。連歌の常識として考えられないほど稀な指合であるが、それは「なほすべきやう無之故に其のまゝおき給ひつると見えたり」(無言抄)とのことである。せつかくの好付合を無にしたくないということである。ここでも「軒近くかけ樋の水のたえぐに」などとすれば凡庸な付合とはなつても指合は容易に解消される。後の連歌なら恐らくそうされる所であろうが、そうはしない所が宗祇の態度だとうことであろう。それについて、こんな少し注意すれば誰でも気付く重大な指合について、近代の注が何の言及もしないのはどういうことであろうか。

軒近くかけ樋ばかりの水落ちて

90 竹の葉乱れ雨すぐる音

《解釈》家の軒近く導かれたかけ樋の水が水溜めに落ちる音以外、何も聞こえるものない静寂の一瞬。突然、風に竹の葉が乱れ、雨の降り過ぎる音がはじめた。

※前線が通過すると突風が吹き雨を伴う。その一瞬を見事に捉えた付合である。指合を生じているが、それを補つて余りあるというのだが、宗祇の評価であろうか。

※「かけ樋」に「竹」が寄合。他の例は、「片山水のかけ樋ゆく音/解けにけり竹よたはる岸の雪」(享徳二年千句・第五「何路」八〇/八一)など。「竹のかけ樋」と言う。「今朝みれば竹のかけ樋を行く水のあまる雪ぞかつ凍りぬる」(新拾遺・一八一六九〇、宗久法師)など。

※第八七句で「霜」が詠まれており、「雨」とは間隔二句。降物同士は三句以上を隔てねばならないから、指合を生じている。後の紹巴流の連歌なら「つれぐ暮らす

日の長き頃」とか「眺めやらるゝ遠方の雲」とか、「遣句」をする所であろう。

竹の葉乱れ雨すぐる音

91 目ざまして露はらぶ夜や更けぬらむ

《解釈》風に竹の葉が乱れ、雨の降り過ぎる音がして、夜中にふと目を覚ます。夜はかなり更けているようだ。床のあたりは露でいっぱいになつていて。

目ざまして露はらぶ夜や更けぬらむ

『解釈』秋の夜、ふと目を覚ます。夜はかなり更けているらしい。床のあたりは露でいっぱいだ。西風が吹き、東の空には有明の月が細く光を放つていて。

※現代人には、「夜が更ける」というのは夜半（午前零時）までかもしれないが、古典文学では、午前零時を過ぎても「夜更くる」という。解りやすい例を挙げると、「あだ人を待つ夜更けゆく山」の端にそらだのめせぬ有明の月」（新勅撰・一五・九六四、嘉陽門院越前）など。月令にもよるが、「有明」と呼ばれる月が見えるのは、おおよそ午前三時以降である。以上、若い人のため。

※近代の注釈は「西の空に残る月のなんと細いことよ」と解釈するが、何かのカン違い。夜が更けて見える細い月（有明）は東に見える。『枕草子』二五三段に「月は有明の東の山ぎには細くて出づるほど」云々とあるごとくである。

93 西吹く風に月ほそき空

秋来ぬと思へば夕べ身にしみて

『解釈』昼間は、まだ夏と変わらない暑さであるが、夕方になると、秋の来たことが身にしみて感じられる。西から吹く風は冷ややかで、次第に暗くなつてゆく空には、月が細く光を放つていて。

※前句の「月」は、先の付合では有明月。この付合では、月令三日～四日の月になる。

※「西」に「秋来る」が寄合。例は「月は西なる梢落ちゆく／秋きてはいから寝ましの叫ぶ夜に」（文安四年八月十九日「何人」六八／六九）など。ただし「東風（こち）」が吹いて春が来るのだから、西風が吹けば秋がくる理屈だ」という地下連歌師流の知識によるものらしく、適當な証歌を挙げることができない。

94 秋来ぬと思へば夕べ身にしみて

すゞろに心何うかるらむ

『解釈』昼間はまだ夏と変わらない暑さだが、夕方になると秋の来たことが身にしみて感じられる。何となく感傷的な気分になるのは、やはり秋だからだろうか。

95 遠く見て花やそれとも白雲に

『解釈』花の咲く季節となつた。遠くの山に白い雲がかかっているのを見ると、ひょつとして花が咲いたのではあるまいかと、判然とせぬまま、何故か心が浮かれる。

※前句の「うかるらむ」は、先の付合では「憂かるらむ」、それを「浮かるらむ」に取りなして、句境を鮮やかに転換している。

※付句の「白雲」の「しら」には、動詞「知る」の未然形「しら」が重ねられ、「それとも知らない→白雲」という秀句仕立になつていて。「行く方もいさ白雲の奥にして」（応仁二年十二月「何人」六九）など、よく用いられる手法である。

96 遠く見て花やそれとも白雲に

むら／霞む山のときは木

『解釈』花の咲く季節となつた。遠くの山に白い雲がかかっているのが見えた。ひよつ

として花が咲いたのではあるまいかと、判然とせぬまま近づくと、それは、山の常緑樹が霞に包まれて、桜花のようにむらむらと見えただけだった。

※前句の「遠し」に「山」、「花」に「ときは木」、「白」に「霞む」、「雲」に「むらむら」と語を対応させるのが主眼で、それはそれで一興であるが、意味的にはそう緊密ではない付合である。

97 むら／霞む山のときは木

かげ高き神の宮だち春を経て

『解釈』山の常緑樹が、むらむらに霞んで見える。その山に、神社の社殿が影高く當まれている。あの神社は、ここに御鎮座以来、一体、幾春を経ているのであろうか。

98 南祭をあふがぬはなし

かげ高き神の宮だち春を経て

『解釈』石清水八幡宮の社殿は、創建以来、多くの春を経て、今も男山の山上に影高く鎮座する。今年も臨時祭が催行されるが、世の誰しもがそれを仰ぎ見るのだ。

※前句の「神の宮だち」を、石清水八幡宮の社殿とした付合である。京都府八幡市の中山山上に鎮座。武家、特に清和源氏一流の氏神として尊崇された。

※近代の注は付句を無季（雑）とするが、何かのカン違いであろう。石清水臨時祭は三月中午日、当然春季である（『宗祇名作百韻注釈』四七八ページ）。

99 南祭をあふがぬはなし

我が人とわけて誓ひの末久に

『解釈』八幡大菩薩は、その昔、清和源氏の人々を自分の氏人として特別に擁護するという永遠の御誓願をお立てになつた。だから、清和源氏の流れをくむ人々は、誰しもが石清水臨時祭を祝い仰ぐのだ。

※付句の仕立は「人よりも我が人なれば石清水きよき流れの末まもるらむ」（新千載・一〇一～一〇〇九、等持院贈左大臣）に依拠する。内容もこの和歌に依り明白。

100 我が人とわけて誓ひの末久に

弓とる道ぞ本をつとむる

『解釈』武芸によつて君辺を守護し奉るのが武家の本分。その本分を懈怠なく務めるからこそ、清和源氏の人々を自分の氏人として特別に擁護するという八幡大菩薩の御誓願は、永遠であるのだ。

※付句の仕立は『論語』学而編に見える「君子務本、本立而道生」の章句に基く。『末』と「本」とが対比的な寄合。他の例は「生野の末に宿をこそとへ／きりぐす浅茅が本にながらて」（宝徳四年千句・第六「朝何」三六／三七）など。同時に「末」に「弓」も寄合。他の例は「はかなくなるは二道の末／梓弓おし出だす船も力にて」（聖廟千句・第十二字反音」五二／五三）など。共に、証歌の必要はあるまい。

「小松原独吟」去嫌一覧 (I)

		季	七	恋	旅	述	植	動	山	水	居	降	聳	光	神	釈	人	名	衣	時	夜	風	聞	
初表	01	かけすすし なほこたかかれ こまつはら	夏	松			木																	
	02	かせしつかなる ゆふたちのあと	夏									降								×	風			
	03	まちいつる とやまのつきに くもきえて	秋	月					山			聳	光								夜			
	04	ふかきみねさへ あきそしらるる	秋					山																
	05	すさましき なかれやたきの すゑならむ	秋					山	水															
	06	おとはうもれぬ いはのしたみつ						水															聞	
	07	ふるもまた こほるはかりの ゆきならて	冬								降													
	08	かれはにかかる ささわくるみち	冬				竹																	
初裏	09	あさたては かせはそてふく のをとほみ			旅														衣	朝	風			
	10	ねしさといつく あともしられす			旅					居										夜				
	11	みるかうちは むかしともなき ゆめさめて		夢		述														夜				
	12	そのひとならぬ おもかけそうき			恋												人							
	13	きのふけふ なれきてなにか にくからむ			恋																			
	14	おもふあまりの うらみとをしれ			恋																			
	15	よしやはな ちらはそれとも うちわひて	春			木																		
	16	ひとりくらせる ふるさとのはる	春						居								人							
一表	17	かすむなよ やまなくさむ まとのまへ	春					山	居	聳														
	18	きゆれはつきを ともしひのもと	秋	月							光									夜				
	19	つりふねも こころややとす あきのうみ	秋	船				水																
	20	ゆふなみきよく かりわたるそら	秋			鳥	水												夕					
	21	はれのほる きりのむらあしきせみえて	秋			草				□	聳										風			
	22	またかきみたれ しきれてそゆく	冬					降																
	23	ふりすてし そてはたかよに ひかるらむ			述											人	衣							
	24	みはしのふへき いにしへもなし			述											人								
一裏	25	いくつにて すめるもかりの くさのとに			×			居																
	26	こころとまるは たたやまのかけ					山																	
	27	とりのねも ゆふくれふかき はなにきて	春		木	鳥													夕	聞				
	28	かすむをみれば つきそほのめく	春	月						聳	光									夜				
	29	はるのよを おもはぬひとや またるらむ	春	恋												人			夜					
	30	ともにあはれむ ちきりならはや		恋																				
	31	わするとて それにならはむ こともなし		恋																				
	32	うらみのほととは しられこそせめ		恋																				
一裏	33	おほよとの まつによるなみ さわくなよ		松		木		水								名								
	34	みるめもくるし かせにゆくふね		船		□	水													風				
	35	こえかたき あきのやまちに やすらひて	秋		旅			山																
	36	かりねのたもと つきにしをるる	秋	月	旅						光					衣	夜							
	37	いほちかく むしもわひつつ あかすよに	秋				虫		居									△	夜					
	38	ゆめになされは おもひならめや		夢	恋														夜					
	39	うかれたら さらすはいひも たえつへし		恋																				
	40	すましみやこの おいのあらまし			述																			
一裏	41	つれなくや ひとことにみむ わかいのち			述										人									
	42	をしみかなしむ はるあきのそら	×																					
	43	やまさとに ふれはくさきを こころにて				草木	山	居																
	44	おもふことなき みそつかなる														人								
	45	みたれしも またをさまれる きみかよに															×							
	46	いまよりみちの すゑたたしかれ																						
	47	まちまちし ひよりをけふの ふねにえて		船	旅			水			□													
	48	なみなれころも はかなくそほす		衣				水												衣				
	49	こひはふち かりのあふせを たのむなよ		恋				水																
	50	うきひとこころ なにかつねなる		恋																				

「小松原独吟」去嫌一覧 (II)

		季	七	恋	旅	述	植	動	山	水	居	降	聳	光	神	釈	人	名	衣	時	夜	風	聞	
51	いたつらの ことはおほき ふてのあと			恋																				
52	つたはりくれば そののりもなし															釈								
53	きくやたれ とほやまてらのかねのこゑ								山						釈	人				夜			聞	
54	あかつき つき は われのみもみし	秋	月											光		人			△	夜				
55	あやにくに あきのそらなと しくるらむ	秋										降												
56	つゆけくわくる のへのゆくすゑ	秋		旅								降												
57	ふるさとも かからはよしや たひのくれ			旅						居									夕					
表	たかつらさとか みのうきをしる			恋												人								
	さきのよや ひとにおもひをつけつらむ			恋											人									
	はな のみやこの あとのもつかせ	春	松			木														風				
	はるふかき しかのやまもと うらさひて	春					山水										名							
	かすみのいつく わたりするふね	春	船					水				聳												
	おきいつる をちのさとさと こゑすなり			旅					居										夜		聞			
	みはよもきふに あかすよそうき					草			□						人		△	夜						
	わかこころ つき はみるやと かけすみて	秋	月											光	人				夜					
	かせひややかに あきふくるころ	秋																		風				
	をしかなく やまはゆふへの いかはかり	秋							獸山										夕					
三 裏	おもひいるへき よのほかやなき					述																		
	うきもたた ゆめのやとりを なけくなよ			夢															×					
	さなからそもそも あめのこのもと					木						降							衣					
	うめのはな たかたをればや しをるらむ	春			木										人									
	かへるをうらむ はるのうくひす	春				鳥																		
	かすみにも いまはとかりの やすらはて	春				鳥						聳												
	すゑにいかなる やまをこえなむ			旅			山																	
	さえむかふ あらしにわひて まよふのに	冬	旅																	風				
	ひくれにかかる みちのものうさ											□							夕					
	まきるやと たのむひとめも かけたえて			恋											人									
名 表	こひしきことを たれにわすれむ			恋											人									
	つらしとて またいつかたに うつらまし			恋																				
	なれこしいほり まつかせもふけ			松			木			居									風					
	こころこそ なくとも つき に ゆめやみむ	秋	月	夢										光					夜					
	をはすてやまの あきのかりふし	秋			旅			山								名								
	ころもうつ おとさへたひの うらみにて	秋	衣	旅															衣		聞			
	とほさかりきぬ いももまつらむ			恋											人									
	かはらしと いひしをいまも たのむよに			恋																				
	しひしはそよく こからしのかせ	冬				木														風				
	はつしもの そののかしとり あさりして	冬				□	鳥					×	降											
名 裏	みやまつたひの かたはらのさと									山	居													
	のきちかく かけひはかりの みつおちて									水	居													
	たけのはみたれ あめすくるおと			竹			竹					降								聞				
	めさまして つゆはらふよや ふけぬらむ	秋										降								夜				
	にしふくかせに つき ほそきそら	秋	月										光						夜	風				
	あききぬと おもへはゆふへ みにしみて	秋													人		夕							
	すすろにこころ なにうかるらむ																							
	とほくみて はな やそれとも しらくもに	春				木							聳											
	むらむらかすむ やまのときはき	春				木		山				聳												
	かけたかき かみのみやたち はるをへて	春														神								
名 裏	みなみまつりを あふかぬはなし	春														神								
	わかひとと わけてちかひの すゑひさに																人							
	ゆみとるみちそ もとをつとむる																							